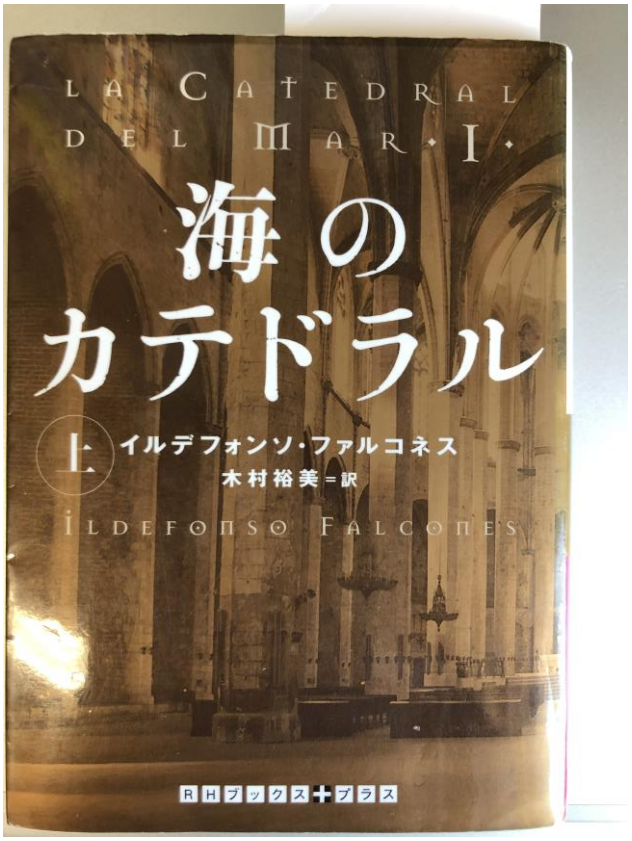
2020. 12. 31

2020 年　記憶に残る本とビデオ

１,「海のカテドラル」(上)　イルデフォン・ファルコネス著　　木村裕美訳



2006 年刊行の作品で日本語翻約版は 2010 年だ。原著刊行直後からベストセラーになり、これまでに世界 40 ヵ国で翻訳され累計 400 万部、原著は版を重ねて５０版を越えたそうだ。

この小説は１３２０年～１３８４年のバルセロナが舞台だ。これだけ人気を得た理由は、封建領主と農奴、悍ましい慣習や社会制度、正義と宗教、自由をテーマにした一大叙事詩であるからと思われる。その間に飢餓、戦争、疫病(ペスト流行)、宗教対立があり、主人公のアルナウの愛と復讐が繰り広げられる。著者あとがきによれば、この小説はベラ三世の「年代記」に沿っている。

尚２０２０年ネットフリックス(Netflix)がこの小説をベースに映像化している。４５分ドラマで１０回シリーズだ。日本語翻訳は文庫版（上下２巻）で１０００ページを超える。小説と映像を平行して鑑賞すると一層理解が深まり楽しめる。バルセロナにこれから旅行する人は事前に読まれることを勧める。私は数年前バルセロナ旅行をした時現地の日本人に紹介された。

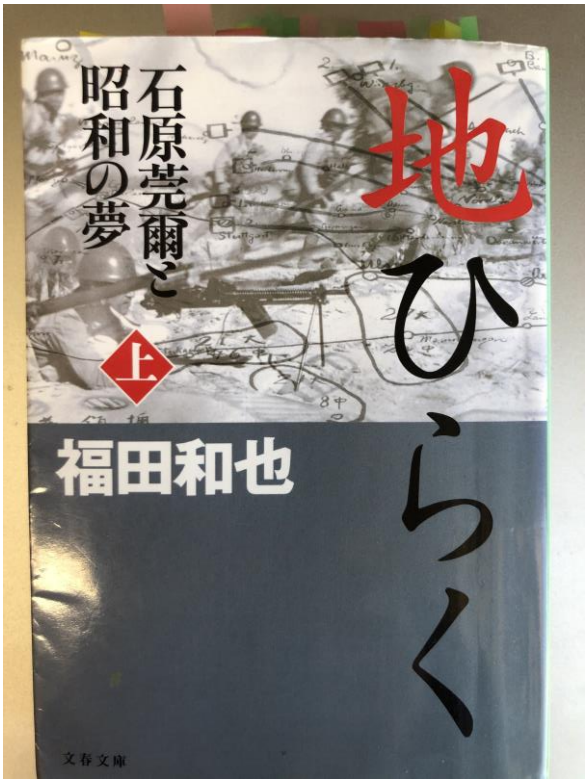
２,「渋沢家三代」佐野眞一著、「小説渋沢栄一(下)」津本陽著、『論語と算盤（超訳）』渋沢栄一著

2020 年度社団法人ディレクトフォースの企業ガバナンス部会の小研究会に参加した。テーマは「渋沢栄一の経営理念について」であった。研究会参加者に基本的知識を共有するために推薦された本があり、私はこの 3 冊を基本書として選んだ。

藍商家に生まれ、商才と武士の気概を持った渋沢青年が幕臣から紆余曲折を経て明治政府の大蔵官僚となり、日本最初の民間銀行頭取として活躍する生涯は痛快劇を読むようだった。彼の伝記から注目したのは徳川慶喜への報恩だった。それを契機に「渋沢栄一の民間外交」について深堀

し、小論をディレクトフォースの研究成果としてまとめた。尚加筆修正した作品は HP に掲載している。

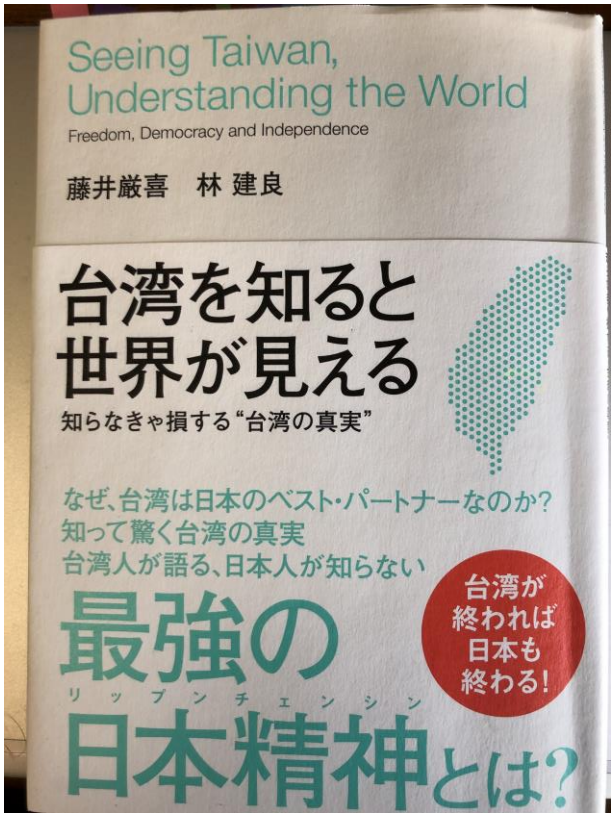
渋沢栄一氏の鋭いところは米国と中国が次の大国と認識していたことだ。その予想は 100 年後の現代まさに現実となった。また渋沢とハワイの繋がりも面白いエピソードだ。



３,「地ひらく（上）石原莞爾と昭和の夢」　福田和也著

石原莞爾は、陸軍幼年学校から士官学校を経て陸軍大学校に入学しエリートコースを走る。その過程で彼が、世界情勢と日本の国情をいかに考えていたのか著者の眼で活写している。学業は極めて優秀で大学校は 2 位で卒業し恩賜の軍刀を得ている。しかし素行や上官への反抗的態度から迂回もしたが、天才的な頭脳と判断力は上官も認めるところとなり、ドイツ駐在武官から関東軍参謀へと進む。ここで満州事変を画策し圧倒的兵力差にも係らず天才的戦略によって中国軍に完勝する。

同時代に自分ならどのように考え行動するのか考えたりすると読書は進まない。完読にはまだ時間がかかりそうだ。



ところで今年はコロナ禍で戦後最も苦難な年になった。しかし昭和前期はもっと酷かったようだ。その解決に向けた政府の対応と石原の生き様に興味は尽きない。1929 に始まるアメリカ発の不景気で世界恐慌が日本を襲った。政府は満州に解決を求め多数の日本人が満州に移住した。

ここに至る政府と軍部の考え方や行動を現代の視点で評価することはバランスを欠くように思う。当時の視点でも考える必要を強く感じた。そして中国人と CCP（中国共産党）への知見を深めたいと感じた。

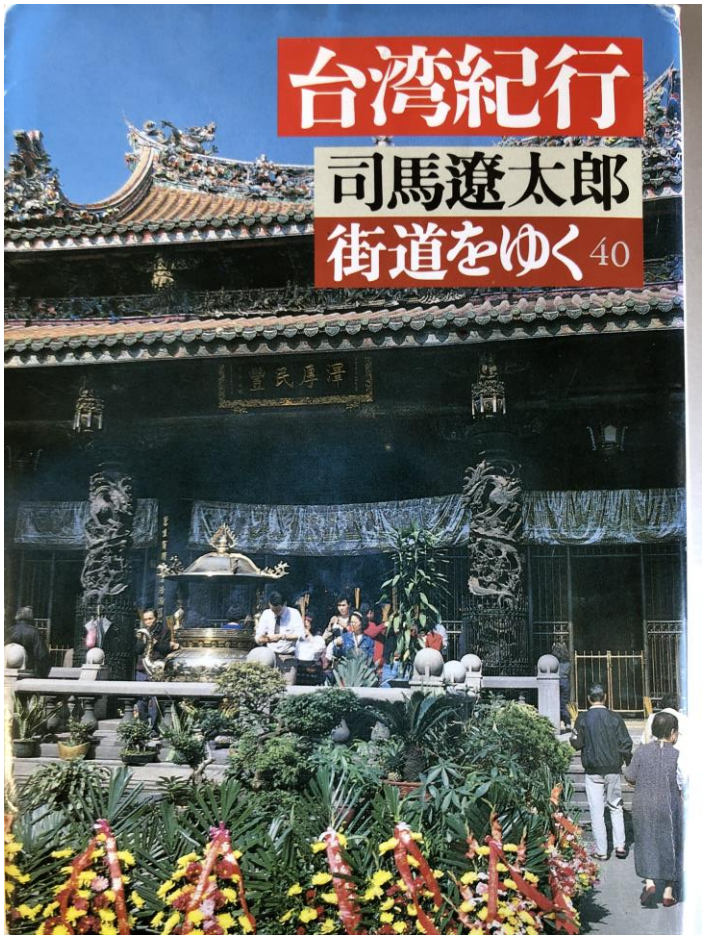
４,「台湾を知ると世界が見える」
藤井厳喜著　林健良著
「街道をゆく(40)　台湾紀行」司馬遼太郎著

2 年前から YouTube（以下 YT）を鑑賞することが多くなった。この 1 年は TV と YT を見る比率は逆転し、１：４ぐらいになった。

さてYTでは平日朝の8時から10時までの「真相深入り虎ノ門ニュース」をよく見る。その中で藤井厳喜氏が登場し、米国大統領選挙などへの解説に興味を持った。林健良氏は台湾人医師だが優れた国際感度を披露していた。

さてこの本の目次を列挙すると、①台湾人とは誰か？「遠い隣人の素顔」　②台湾に宿る日本精神　③苦難の道を歩んだ戦後の台湾人　④台湾人は日本の何を尊敬しているか？　⑤戦後日本が喪失したもの、台湾人の視点　⑥台湾を狙うチャイナ、チャイナに媚びる日本　⑦台湾を守ることは日本を守ること、である。

今年10月李登輝総統が97歳で亡くなった。その最大の功績は台湾に「台湾人」というアイデンティティを根付かせたことだと思う。そして愛国心・自由・民主主義を定着させた。司馬遼太郎の台湾紀行を読むと李登輝と台湾の数奇な運命が良くわかる。



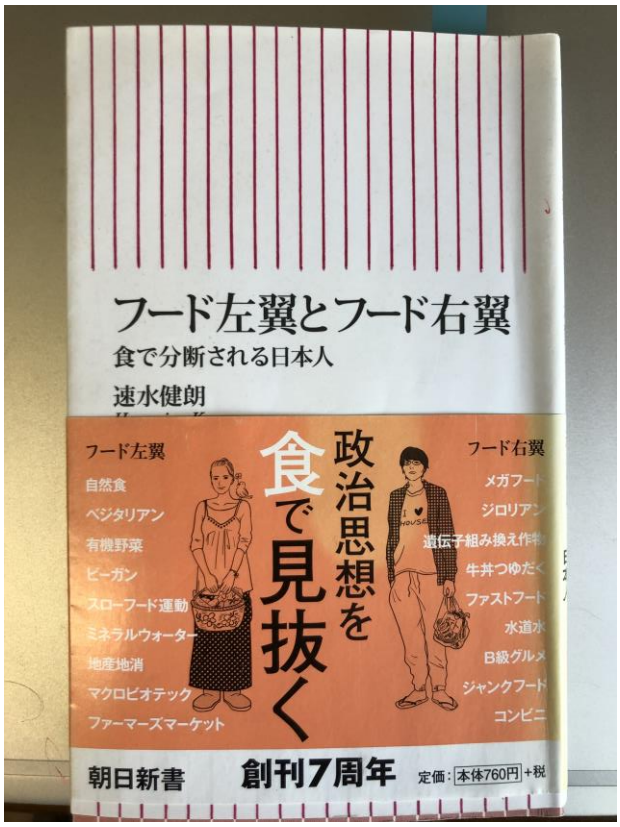
コロナ禍で台湾は世界一上手く制御した国である。中国がいくら無視してもこの事実は世界中に広まり国際的評価は高まった。国際情勢に関する情報は、今や国際宣伝の場でもあり、地上波TVだけでは到底真実は分からない。むしろ誤ったメッセージを流していることが多い。自分なりの歴史観・世界観を持つ事が益々重要になってきたと思う。

５,「フード左翼とフード右翼　食で分断される日本人」　　速水建朗著

はしがきに、「日本人は食でつながる民族である。アメリカであれば自由が国家を一つにする基本理念だし、フランスなら自由平等博愛だ。日本にあたるのは”食”だと」記載されている。これが最近大きく２つに割れてきたと現代社会を分析評価している。

因みにフード左翼とは地産地消と有機野菜を愛する人だ。それは健康志向で地域主義という思想に繋がる。具体的には、「ベジタリアン、有機農業、スローフード、無添加、無農薬」の食物を志向する人だ。

他方フード右翼とはその対極で、「ファストフード、ジャンクフード、マック、カップヌール、即席ラーメン、B級グルメ　栄養ドリンク」を愛し食する人だ。人生やりたい事をやり、美味いものは（少々不健康でも）ためらわず食すタイプだ。私はどうも後者のようだ。



今年の新型コロナ感染症に対する日本人の行動を観察すると、コロナ左翼とコロナ右翼という分類が出来ると感じている。

コロナ左翼は、マスクへのこだわりが非常に強く、どこに行くにも携帯し公園のような周りに人が居なくてもマスクをつける人だ。つけていない人を軽蔑し見下す性向がある。そして対応としてPCR 検査を出来るだけ多くの国民に実行すべしという政策を支持する。無症状でも沢山検査して陽性だと判明すれば病院（またはホテル）に隔離すべしということだ。

他方コロナ右翼とは、新型コロナを風邪の一種（インフルエンザ並み）と認識し、公園で周りに人が居なければマスクを外す。ゴルフ場では周りにひとが居ないのでマスク無しでプレイする人だ。検査対応は微熱や味覚障害など症状があり医者の指示がある場合にのみ PCR を受診する人だ。これはこれまでの感染症で行われてきた対応だった。コロナ左翼は新型コロナをこれまでにない対応を支持する勢力だ。寛容性と合理性に欠け経済への悪影響にも鈍感な人が多いようだ。コロナでも私は右翼に属するようだ。

以上

（参考）　2020年上半期で記憶に残る本とビデオ

１、　「忘れられた軍隊」（アマゾンプライムビデオ　The forgotten Army）

この映画はアマゾンプライムで１月から同社独自作品として放映された。タイトルに興味を惹かれシリーズをビデオ鑑賞したところ、シンガポールとミャンマー（インパール作戦）を舞台に１９４０年末から展開したインド独立戦争を描いた史実をベースにしたものだった。

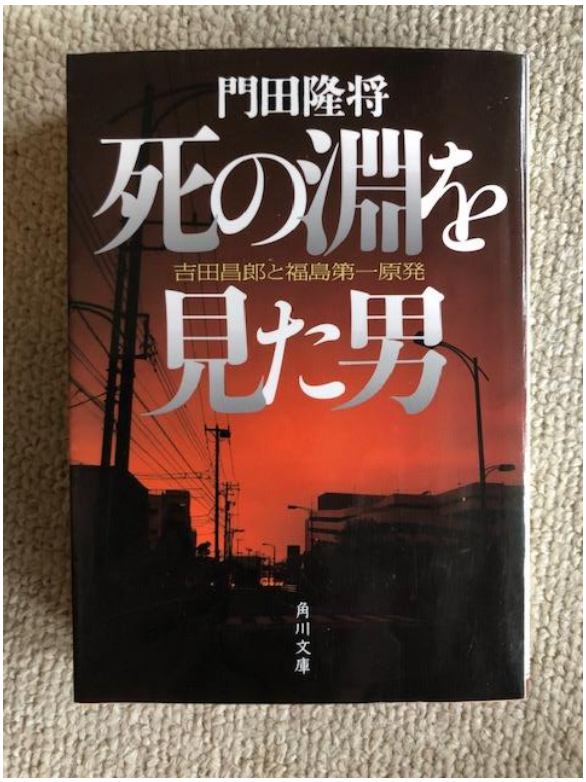
インパール作戦は大東亜戦争の中で日本軍最悪の戦闘程の知識しかなかったが、この動画を見てインド独立戦争と不可分あったことが分かった。さらにこの戦争が１７世紀以来植民地として苦しんできた東南アジア諸国の国民に希望の光を与えたことも分かった。この動画を契機に以下の書籍を読み東南アジア近現代史について多くの知見を得た。

①　「インパールを越えて　Ｆ機関とチャンドラボースの夢」　国塚一乗著

（マンガ「インドの嵐」としても描かれている）

②　「Ｆ機関」　藤原岩市著

③　「ビルマの夜明け」バーモウ著　横堀洋一訳



２、「フクシマフィフティ」（映画）　「死の淵を見た男」　門田隆将著

フクシマフィフティは福島原発事故をテーマにした今年２月上映の映画だ。門田隆将の著書がベースになっており、東北大震災の津波で電源が故障し、原子力発電所の復旧を巡る人間ドラマ（東電本社、官邸、発電所の人間）である。

3.11 の事故発生から１週間に福島で何が起きていたのか。リーダーと仲間たちの苦悩、奮闘、家族への思いなどが丁寧に描かれていて非常に感動的であった。

ただ発電所２号機が万一爆発していたら首都東京は放射能に汚染される危機があった。最後に奇跡？が起きて事なきを得たが、当時の政府と東電本社の対応（隠蔽体質）には問題が多い。映画では余り詳しく触れていなかったが、在京の外国大使館職員の多くは帰

国か大阪に移動した。震災当時勤務先にいた会社の中国人留学生は即帰国して日本に戻ることは無かった。海外メディアは東京汚染のリスクを相当流していたのだ。尚主役の渡辺謙や佐藤浩市の演技は見事だった。当時の民主党幹部は見たくない映画だろう。

３、　　「女帝　小池百合子」　石井妙子著

都知事選開幕前の６月１５日に購入した時には１５万部刷られていた。著者の石井妙子さんは２年前にも月刊文芸春秋で小池百合子の経歴疑惑記事を書いたが余り反響がなかったそうだ。しかし今回、小池の学歴詐称疑惑を幼少からの生涯を描くことでその真偽を読者に問うている。読者は容易に判断できると思われる（注：因みにカイロ大学は小池氏の卒業を何度も公表し認めている。卒業証書も不明確ながら公表している）

芦屋に生まれた幼少期の境遇からカイロでの５年間が人生にどんな影響を与えたか。カイロ大学卒という看板を最大限利用しマスコミと政界を駆け巡っていく姿は壮観だ。男社会への挑戦でもあったように思える。我が国を代表する有力な政治家が、上手に操られているかのようにさえ見える。最後に小池物語に登場する政治家とメディアはこれまで、彼女の実態と素顔に甘い評価をしてきたと痛烈に批判している。石井妙子氏はプロのノンフィクションライターであり勇気ある女性である。

４、　　「フィナンシャル思考」　朝倉祐介著

著者は、フィナンシャル思考に対峙するのが「PL 思考」だという。売上−費用=利益という短期的で単純な思考の限界を解かりやすく解説している。

会計知識は過去の業績を理解する上で不可欠で重要な知見であるが、未来予測するには不十分で、当然ながら事業内容、経営者、環境変化など多面的な情報分析が必要だ。当たり前のことだが忘れがちな知識を経営者と投資家向けに解説した参考書である。

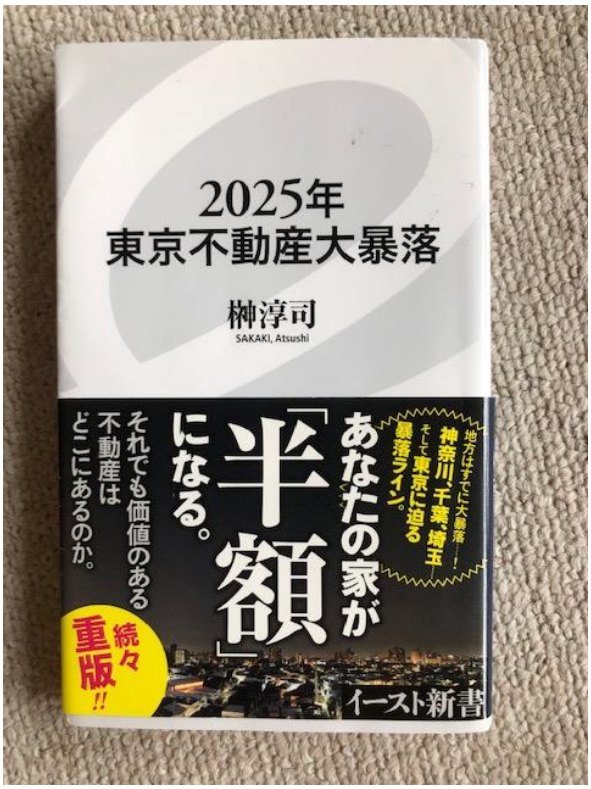
５、　　「あきらめない」　村木厚子著

「食べて眠れば人生なんとかなる」　村木厚子さんが 164 日の勾留生活を綴った本の一節である。2010 年 9 月 10 日村木さんは無罪判決を勝ち取った。

　同じ日に日本振興銀行は民事再生法を申請した。日本で唯一預金が１００％戻らなかった銀行（ペイオフ）の倒産である。この銀行に 2011 年 8 月に再生請負人として入社した。民事再生後の３か月は超多忙で体調を崩したことがあった。その時この本に出会い、病気にだけはなるまいと頑張れた。救いの本である。

６、「２０２５年東京不動産大暴落」　榊　淳司著

　コロナ禍で東京オリンピック・パラリンピックが延期された。そして２０１７年からの米中貿易戦争と重なって２０２０年の世界経済は戦後最悪の様相を呈しつつある。株価は早々に反応し暴落した。不動産価格の下落も時間の問題である。



　この本は２０１７年出版で、著者は不動産価値とは利用価値であるとの確信から、東京と日本の近未来を展望している。

　軽井沢スキー場にバブル期に建設された住居は戸建１０万円でも売れないそうだ。日本には９００万超の空き家もある。不動産価格が上がる地域は極めて一部の場所であることを肝に念じて資産を守りたい。

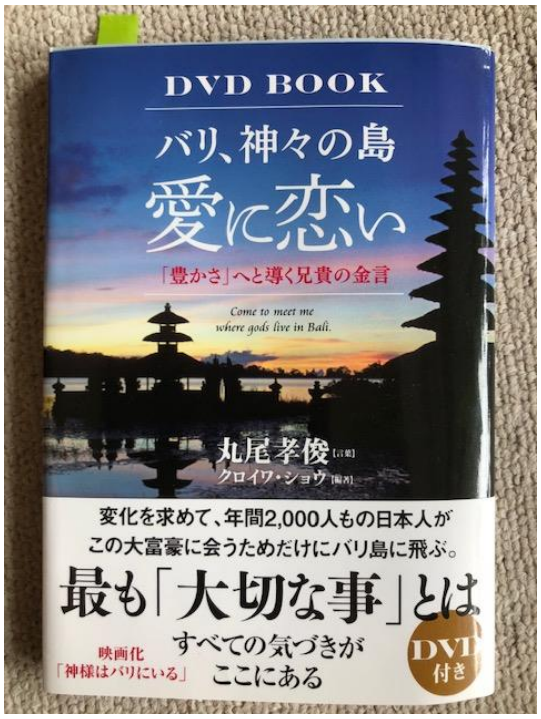
７、「バリ、神々の島　愛に恋い」丸尾孝俊著

インドネシアのリゾート地で有名なバリ島にアニキと呼ばれる日本人が住んでいる。「神様はバリにいる」という映画も２０１４年に上映されている。主演は堤真一であった。

この本は主人公であるアニキの人生観を纏めたものだ。DVD もついているのでバリでどんな生活をしているかも大凡わかる。

アニキの人生観が古き良き日本にある道徳観を基盤にしているようだ。戦後の日本で失われた道徳や倫理についての言葉が美しく素晴らしい。「他人は鏡」「失敗した時ほど笑え」「仕事をかけもつ」「先人を敬え」などなどだ。

尚大富豪になるまでの武勇伝や成功哲学の解説本は１０数冊ある。



８、世界「倒産」図鑑　荒木博行著

著者は、グロービス大学院の副研究科長を経て株式会社学びデザインの代表取締役社長である。

２０１９年の出版で有名な企業２５社の倒産事例を分析している。倒産の類型を、戦略上の問題（「過去の亡霊型」「脆弱シナリオ型」）とマネジメントの問題（「焦りからの逸脱型」、「大雑把型」、「機能不全型」）に分けて非常に解かりやすく失敗の背景・原因・教訓を纏めている。２５社の中では、そごう、鈴木商店、リーマンブラザーズ、NOVA、林原が印象に残った。

過去３０年近く倒産事例解説本を何冊か読んできたがこの本がベストである。それまでの倒産事例解説本を断捨離した。